

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこゝとばを掲載します。

知り合いのK子さんが、書道を始めた。しばらくたつてから、今まで習ったところを清書して出すようにいわれた。そこで清書を二枚書いて持っていったら、先生は即座にこう言った。

「同じ字の清書を二枚出すということはありません。墨がうすくても、間違つていても、まずくできあがつても、これ一枚が自分の全力と思つて、しっかり書かねばなりません。それが清書というものです。しくじつたらやり直せばよいというのならしのない気持ちで書く」と、何枚書いても、清書にならないのです。だから、私に出すときにはこれ一枚、書き直しはしないと心を決めて書いたものを持って来てください」

K子さんは、この時、人生のある重大なものに触れたように、心が引き締まった思いでした、と後に私に語ってくれた。

絵でも、展覧会に出すのに、二枚同じようなものを出品して、さあどちらか選んでくださいというわけにはゆかない。大勢の前で演奏したり、歌つたりするのに、二度ずつやつて、皆さん、どちらが良いと思ひますか、などといったら、聴衆は怒つてしまうだろう。

芝居やバレエなどでもまったく同じことで、練習や稽

1月のテーマ | 全力を尽くす

人生は一本勝負

丸山竹秋



古の時は、何回やり直したつていいだろうと思われるかもしれないが、一々については、その時々々の全力を尽くしてやらなければならぬ。力を入れ、心を込めて、公演と同じ時のようにやろうと努めなければ、真の練磨にはならないのである。心に余裕を持つことは大切だが、何度でもいいかげんにやつてよいということでは、技は磨かれなないと、その道の達人たちは一様に説いている。

試合の苦しいコースに入つて、どうも今、具合が悪いからもう一回やり直してくださいよと、自分だけの勝手をいうわけにはいかぬのと同じように、自分の境遇が悪いからといって、また裕福な人の子に生まれ変わつて人生をやり直すわけにはいかないのである。

この意味で、しようと思いついたことをぐずぐず躊躇して延ばすことは、幸福を失う大きな原因となる。お花でも裁縫でも、習おうと思つたら、その時にさつさと習うようにしなければならぬ。

まあまあと思つていると、いつまで経つても、習うことはできない。お世話になつていられる人を訪問し、お礼をしようと思いつく。しかしまあ、そのうちにと、ぐずぐずしていると、いつまで経つても出かけられず、知らぬうちに先方は感情を害していることもある。

人生は一本勝負である。待つたなしである。明日では遅すぎるのである。新しい年を迎えて、今年こそ私たちは、その時々をフルに生かし、充実させてゆこう。

（著書『幸福の決め手』より）